

# ハハコグサ

牧 幸 男

信州の四月は、「春」という言葉が最も相応しい季節だ。寒さのため家にこもりがちの人々も外の風景に関心を示し、自然を楽しむようになる。爽やかな気候に、春は様々な花の香りが漂う。現在の私達は、この香りを楽しんでいるが、日本人の香に抱く感覚は、昔は対象に考えていなかったようだ。例えば、『万葉集』(729~759)には花を課題にした短歌が多いにも係わらず、香を詠んだものはわずか7首にすぎない。当時の人が香に鈍感だったとは思えないが、その理由を考えると人々は生活環境が香に接しようとする「雅」と「ゆとり」が少なく、短歌に関する表現は視覚的であり、直感的であったこと、当時は香は未だ未知の世界で、宗教の領域であり、庶民の趣向や感情の対象ではなかったこと、同時に、当時は香りの高い植物が少なかったこと等が推察できる。現在の私達の感覚は、春は香ともよにやってくると思っている人々が多いのではないだろうか。

当時から香は少ないが関心を深めてきた植物に、ハハコグサがある。道端や畑の隅に3月になると沢山の植物の花が咲き出す。ひとまとめに「雑草」と呼ばれる草花であるが、古くから私たちの生活に溶け込み、役立ってきた植物も多い。母子草もその一つ、綿毛に包まれた小さな黄色い花が咲き出すと、春が来た喜びをしみじみと噛みしめたりもする。全体が白っぽく見え、茎や葉に柔らかい綿のような毛が密に生えている母子草はその代表である。植物自体は、見栄えがするほどの植物ではないが、なんとなく親しみを感じる。名前の響きが優しいのか、日本人の心の奥に母親の感情を抱かせるのかもしれない。特に、母子草は乾燥しても黄色の集まった小粒の花のかたまりがいつまでも変色しないので、母の愛がいつまでも代わらぬしるしと私は考えることがある。母子草は、縄文時代後期にムギ類の栽培とともに朝鮮半島経由で中国大陸から日本列島に渡来してきた史前帰化植物のひとつとされている。



道端のハハコグサ

母子草は東アジアの温帯から熱帯にかけてごく普通に目にするキク科の越年草で、道端、家の近く等いたる所に生えている。冬期はロゼット根で過ごし春になると茎を伸ばす。茎の高さ20~30cm、基部から分枝して直立し、やや硬い。葉は互生し、線状倒披針形、茎と共に白軟毛がかぶさってソフトな感じがする。春から夏にかけて茎上端に細かな黄色の頭花を散房状に多数つける。暖かそうな綿毛に包まれているので寒に強そうだが、夏は、暑すぎるとみえて枯れてしまう典型的な冬から春にかけての野草である。『新編野新日本植物図鑑』にはハハコグサの名称を付した植物がヤマハハコ、ホソバナヤナマハコ、カワラハハコ、ヤバネハハコ、クリヤマハハコ、タカネヤハズハハコ、アキノハハコグサが8種収載されている。また、母御草でなく、父子草の名を冠した植物もある。チチコグサ *G.japonicum* とチチコグサモドキ *G.purpureum*、エゾチチコグサ *G.dioica* がある。この中で父子草は母子草とよく似ているが父子草の花色は褐色、母



エーデルワイス

子草は黄色であるので区別ができる。類似植物で私達が良く耳にしたり目にするミヤマウスユキノ *Lontopodium fauriei* (エーデルワイス) と我が国のハヤチネウスユクソウ *L. hayachinense* があり、アルピニスト仲間ではシンボル植物とされている。

私達が膾炙している母子草の名は『文徳天皇実録』(879)の嘉祥3年(850)の記述に、母子草の名前を見ることができる。当時、紙や白い布が高価であったため、庶民が白い母子草で体を撫で、穢<sup>かたしろ</sup>や罪の形代として、川に流し災いを除く習慣からこの植物名が生まれたと考えられている。さらに、身代わりとしての<sup>ひとがた</sup>人形である形代を、<sup>ごぎょうぶつ</sup>浮かし仏や御形仏と呼んでいた記が李時珍(1518-1593)編纂の『本草綱目』(1596)の記述を参考に、和名、説明を加えた『重訂本草綱目啓蒙』(1847)にも残っている。このような呼び方や習慣から、形代に使われた<sup>ごぎょう</sup>母子草を御形と呼ぶようになったのである。『大言海』には、<sup>おぎょう</sup>御形を「<sup>ひとがた</sup>母子ノ<sup>にんぎょう</sup>人形ナリ・・・御形ハ人形(人形)ニ由アル語ナルベシ」とある。御形をゴギョウ、オギョウと読んだり五行と書くこともあるが、新大辞典、日本語大辞典(講談社)にはオギョウが、広辞苑(岩波書店)にはゴギョウ、オギョウが採用されている。

身近な植物であり、優しい名前のこの植物は、昔から多くの詩歌に詠まれてきた。

花の咲く 心も知らず 春の野に はらはらつめる ははこもちひぞ 和泉式部  
老いてなお なつかしき名の 母子草 高浜虚子

植物名について、牧野富太郎博士は「ハハコグサと呼ぶのは正しくない。恐らく茎の白毛も、頭花の冠毛もほおけ立っていることから付いた名であろう。それを旧仮名遣いではハケルと書いたことから母子の当て字が生じたと思う。漢名は<sup>そきくそう</sup>鼠麴草である。」と述べている。鼠麴草の意は葉に毛があって鼠の耳に似ているから。別名は地方により、生活に密着していた植物だけに、モチクサ(草餅の材料から)、アワゴメ(粟米)、ウサギノミミ(兎の耳)、ホーコ、マワタソウ(真綿草)、キャーロツリクサ(蛙釣草)、コウジバナ(麴花)、モチグサ(餅草)など方言名が沢山存在する。意味不明だが、カラスノオキユウ(鳥のお灸)と呼んでいる植物名もある。

学名 *Graphalium multiceps* で、属名はフェルトの意で全草が綿毛で覆われているから、種小名は多くの意で、黄色い小花が多く咲くからである。

薬用は、花が付き全草の乾燥した植物の生薬名を「鼠麴草」と呼び、薬にする。効能は鎮咳、去痰、扁桃炎、のどの腫等である。漢方で使うことはないが、中国、台湾でも民間療法として使われている。



ハハコグサ



ホオコグサ



よもぎ餅

食用には七草粥、草餅、団子等に利用。小野蘭山(1792~1810)著『本草綱目啓蒙』(1803)に「3月3日の草餅はこの草で作ったものだが、近ごろはヨモギで作るほうが、香があり、緑が濃くて喜ばれるようになった。」と記述しているように、江戸時代中期ごろから、草餅に蓬を用いるようになったのである。花言葉は「切実な思い」「忘れない」「無償の愛」「いつも思う」「見栄え」である。